http://commonf.net　E-Mail:jimukyoku@commonf.net

茅風

— Breeze from the field of thatch-grass —

2021年6月25日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信63号

看板が設置された「ゆるぶの森」入口

■ 1月～6月上旬の活動報告（事務局）・・・・・・・・・・・・・1
■ 第20回定期総会関係報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
◆2021年度の新規・重点項目
◆2021年度の主な活動計画・日程
◆2021年度の役員構成
■ 総会セミナー「茅葺文化継承のために」報告・・・・・・4
◇講師　日本茅葺き文化協会(安藤邦廣代表理事・上野弥智代事務局長)
■ 2020定例活動⑤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
「雪原トレッキング」
◆開催報告(草野　洋)
◇参加者感想(デリア・ファン、須藤光代)
■ 藤原だより-現地事務所報告-（北山　郁人）・・・・・・8
編集後記(敬称略、リレー投稿・野守のつぶやきは休載)

【２月】

●１日　茅風62号発行

【３月】

●６、７日　雪中トレッキング実施。当初、19名の申し込みがあったが、新型コロナ非常事態宣言延長を受け、急遽、県内在住者８名のみで実施した。苦肉の策ながら、多彩な人材の参加を得、県内限定の独自なエポックメイキングなイベントになった。

●２１日　日本茅葺き文化協会主催の、茅葺き、茅採取ユネスコ無形文化遺産登録記念オンラインフォーラム「阿蘇の草原に茅葺きの復活を」に２名参加。

●２９日　新旧塾長が、交替挨拶・野焼きの案内のため利根沼田森林管理署訪問。

【４月】

●１７日　第２０回定期総会実施。セミナーは、安藤邦廣筑波大学名誉教授の講演「茅葺文化の継承のために」

●２０１１年の東日本大震災に際し、福島県の仮設住宅に上ノ原の茅を提供したが、これを担当した福島県土木部建築総室が、日本建築学会の新設した「復旧復興特別賞」を受賞。（趣旨は「東日本大震災および原子力災害における福島県の応急仮設住宅供給と復興公営住宅建設の取り組み」）

【５月】

●１、２日　第１回一般参加プログラム「野焼き・山之口開け」を予定していたが、新型コロナ感染症対策のため、昨年に続き中止。

●同様に、例年協力している麗澤中学校「樹木観察会」も昨年に引き続き中止。
また、６月に計画していた日光茅ボッチの会訪問も参加を辞退。

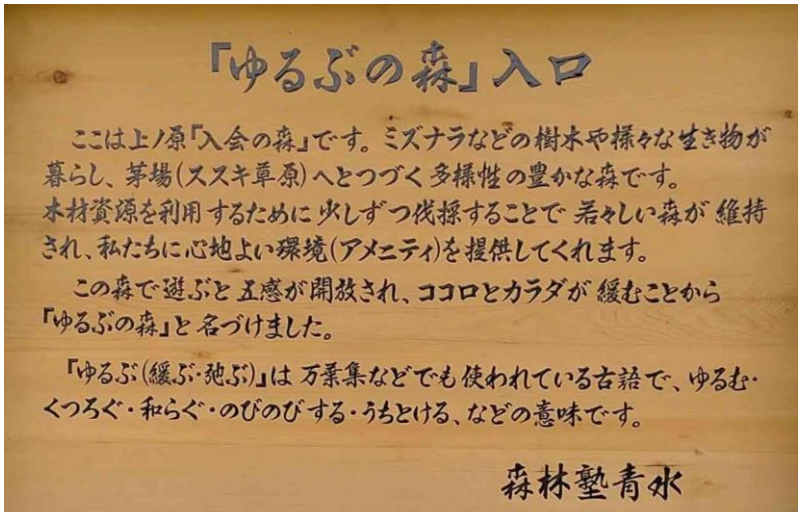
●４日　ゆるぶの森案内看板を設置。

【６月】

●４日　第１回在宅講座テキスト「リトリートについて」(作成・柳沼翔子会員)配信

●７日　第２回在宅講座テキスト「奥利根・藤原　家族でB＆S観察旅日記」（作成・清水英毅顧問）配信

（以上）



５月４日、上ノ原に「ゆるぶの森」の案内看板を設置しました。
さまざまな恵みを分けてくれるだけでなく、心も体も癒してくれる「ゆるぶの森」が青水の本格的な活動再開を待っています。

■第 20 回「定期総会」を開催
2021 年度事業計画を承認、総会終了後にセミナーを実施　　報告　稲　貴夫

森林塾青水の第 20 回「定期総会」が 4 月 17 日(土)、中央区勝どき区民館を会場に会員１９名が参集して開催されました。総会は北山塾長の挨拶に続き、清水顧問が議長を務め進られました。全議案が全会一致で承認、可決された総会の概要をお伝えします。

○第1号議案「2020 年度事業報告及び会計収支案」

草野事務局長が説明。会の発足から２０年、上ノ原での活動開始から１８年が経過し、近年は毎年三千束以上の茅を生産している。上ノ原が「ふるさと文化財の森」へ指定され、また「茅採取」がユネスコ無形文化遺産「伝統建築工匠の技」の一つに認定されたことを励みに、担い手の確保を課題に活動した。新型コロナウイルスの影響で活動は計画の７割程度であったが、「在宅講座」を８回開催し、新規会員も５名加入、群馬県内からの参加者も増えたことなどを報告。

ニホンジカの状況についての質問には、センサーカメラで重複を含め５０頭ほど確認していること。ミズキの皮剥ぎもあり駆除が必要な状況になっていることなどを説明。

○第２号議案「2021 年度事業計画及び会計収支予算案」　草野事務局長が前年度からの課題とともに、茅場に生育する希少植物の保全と増殖にも取り組んでいくことを説明。

地域おこし協力隊や教育機関など、外部との連携に関する質問には、麗澤中学校との関係などのほか、青水会員が協力隊として自伐林業に取り組んでいる例、また、群馬県も支援している「風の谷プロジェクト」のメンバーが上ノ原を視察したことなどを報告。また会員から利根川源流としての広報や野鳥観察の実施についての意見などが寄せられた。

新年度事業計画の骨子及び基本方針等は以下の通り

・都市、地元、利根川流域の住民が**飲水思源の志**でつながり、楽しみながら汗を流す。

・**人と自然のほどよい関係**で、生き物たちでにぎわう上ノ原の「入会の森（茅場・ミズナラ林）」を保全・利用する仕組みを築く。

■基本方針

上ノ原「入会の森」の茅草原、ミズナラ林を保全しながら、自然の恵みを持続的に利用する仕組み構築し、地域のタカラとして次世代につなげる。

■２０２１年度の重点取り組み

・茅刈衆の確保と人材育成をおこない、安定的に茅を供給できる仕組みを構築する。

・ユネスコエコパーク、ふるさと文化財の森指定、ユネスコ無形文化遺産、SDGｓ未来都市の理念に沿って、都市住民、地元住民、行政との協力体制を再構築する。

・茅場の希少種の保全と増殖を試験的に行う。

	ベースの活動	今年度の新規または重点項目
茅　　場	野焼き	侵入樹木の除伐、希少植物の保全と繁殖
	茅刈り・運びだし	効率的な茅刈り
	茅買上げによる茅活用のしくみ定着化	センサーカメラによる生き物調査（赤谷プロジェクトとの連携）、ニホンジカの調査捕獲
ミズナラ林	二次林の若返り対策と利用促進	抜き切りの推進、ゆるぶの森の活用
	自伐型林業の推進	ミズナラの原木マイタケ栽培
		炭焼きなど森林資源の活用
次世代への橋渡し	環境資源の発掘、掌握、アピール	重要里地里山500、モニタリング2000、昆虫等保護条例指定地、SDGｓを意識した活動
	藤原小中学校との協働	希少植物の栽培
	環境教育のお手伝い	麗澤中ほか
活動基盤	担い手の拡充	茅刈新規参入者の促進、地域おこし協力隊、自伐型林業の研修参加者への働きかけ
	流域諸団体との連携	大学など教育機関との連携、働きかけ（前年から継続）

○第3号議案「2021年度役員選任」 前年度と同じ体制で執行部を運営するとともに、草野事務局長が下流部会統轄を担当することなどを承認。（右に役員構成を掲載）

最後に岩井会員、鹿熊会員から近況の報告があり、総会は終了しました。

◆2020 年度の主な活動計画・日程について◆

新型コロナウイルス等の影響で今後も延期、中止の場合があります。事前にホームページを確認下さい。

月	主な活動予定（定例活動・楽習会・流域連携等）
総会で承認された活動の内、6 月までに予定していた定例活動①「野焼き・山の口開け」、「麗澤中学校樹木観察会」、定例活動②「遊歩道整備と生物モニタリング調査」等は新型コロナ感染防止の観点から中止としました。本格的活動再開は 7 月からです。	
7	定例活動③防火帯刈払い・遊歩道整備/17(土)・18(日)
8	下流部会活動・日光茅ボッチの会交流/8(日)
9	定例活動④群馬県民優先プログラム「里山でリトリート(ゆるぶの森＆諏訪神社)」/4(土)・5(日)
10	定例活動⑤ミズナラ林整備/2(土)・3 日(日)
	定例活動⑥茅刈り/30(土)・31(日)
	茅刈りウィーク/30(土)～11 月 7(日)
	麗澤中学校奥利根水源の森林フィールドワーク/期日未定
11	定例活動⑦茅出し･山の口終い/20(土)・21(日)
12	活動予定なし
1	楽習会・流域連携活動、小貝川・菅生沼の野焼き/期日未定(後半の土日)
2	活動予定なし
3	定例活動⑧キャンドルナイト･雪原トレッキング/12(土)･13(日)
通年及び開催月日未定の事業 ・茅、希少種の育成状況モニタリング ・楽習会(2、3 回を予定) ・その他、藤原小中学校、地元ＮＰＯ、自伐林業、日光茅ボッチの会などとの協働、連携を図る。 ・秋に予定されていた全国草原サミットは延期。	

◆今年度役員構成◆
～塾長･事務局長･幹事･顧問･相談役等紹介します～

塾長

北山　郁人　全般統轄
みなかみ事務所長(地元・みなかみ町役場ならびに支援企業との連携、資材等管理)

事務局長

草野　　洋　全般にわたる企画・管理
全般統轄補佐
下流域部会統括

幹事

稲　　貴夫　広報（「茅風」編集長)、東京楽習会、総会/セミナー　会計監査兼務
岡田伊佐子　麗澤中「樹木観察会/FW」、自然ふれあい学習、東京楽習会、総会/セミナー
尾島キヨ子　麗澤中「樹木観察会/FW」、下流圏プログラム補佐、茅刈り合宿
夏目啓一郎　地元の活動参画促進、NPO 奥利根水源ネットワーク、地域貢献プログラムほか
西村　大志　WEB 管理）、助成事業、広域連携補佐（草原再生ネット、草原サミット）、麗澤中(統括、窓口)
藤岡　和子　児童青少年の教育プログラム企画実行、コモンズプログラム企画開発、茅刈り合宿補佐
増井　太樹　広域連携(草原再生ネットワーク)
松澤　英喜　事務局長補佐（予算管理、会員管理、総会、幹事会ほか）、定例活動関連事務、助成事業補佐、WEB 管理補佐、会計・出納
吉野　一幸　地元代表

顧問

安楽勝彦　笹岡達男　滑志田隆　清水英毅

オブザーバー/相談役

高橋　英俊　行政／みなかみ町役場窓口（エコ・パーク推進課次長兼係長）
林　　親男　地元関係相談役(藤原案内人クラブ)
川端　英雄　アドバイザー

本メンバーで一年間、青水を運営します。
皆様のご協力をよろしくお願い致します。

セミナー「茅葺き文化継承のために」
講師　日本茅葺き文化協会
安藤邦廣代表理事・上野弥智代事務局長
報告　稲　貴夫

総会後のセミナーでは、日本茅葺き文化協会代表理事の安藤邦廣先生(筑波大学名誉教授)より「茅葺き文化継承のために」と題して講演をいただき、続いて同会事務局長の上野弥智代さんより、日本及び世界の茅葺き文化の状況について報告をいただきました。

安藤先生は最初に、「茅葺き文化」の基盤にある「草原」の人類史における位置づけについて解説。人類は草原で進化を遂げてきたこと、そして農業も草原の文化であることを通して草原の持つ根源的な価値や、草原から離れてしまった現代文明の課題を指摘しつつ、茅葺き文化の意義を次の通り力説されました。以下にその概要を報告します。

○「茅採取」がユネスコ無形文化遺産に登録された理由

昨年暮、ユネスコ無形文化遺産として、大工左官など 17 種類の「伝統建築工匠の技　木造建造物を受け継ぐための伝統技術」の中に「茅葺き」だけでなく「茅採取」が登録されたことの意義は大きい。「茅採取」は本来、地域住民による農作業の一つとして行われてきたものであり、茅刈り、乾燥、茅選り、茅の育成、火入れを含む茅場の管理の総称のことである。茅葺きを支える循環の輪を成り立たせるための大切な要素であると同時に、そこには地域ごとの地勢や植物に関する知識や慣習など、奥深い知恵が前提として存在していることを強調したい。

また、20 年毎の式年遷宮により、社殿が新しく造り替えられている伊勢神宮では、正宮など大切な社殿はすべて茅葺きで造られていることにも大きな意義がある。童話の「三匹の子ぶた」にもみられるように、西洋では大切な建造物は不燃建築が原則であることと比較すると、茅葺きは平和な社会の象徴的な技術ではないかとも思える。

○中部山岳地帯の事例にみる茅(カリヤス)の利用

日本の中部山岳地帯に見られる合掌造りを例に上げて、茅が循環的複合的に利用されてきたことを解説する。合掌造りの集落は養蚕の経済力によって成立したものであるが、桑畑だけでなく茅場も重要であった。中部山岳地帯の茅場は、ススキでなくカリヤスが主流であるが、焼畑の跡地が桑畑や茅場、薪炭林として管理されるようになっていったと考えられる。他に山火事や火山の噴火によって形成された草原もある。

カリヤスは「刈りやすい」が語源とされるが、標高 700～1000 メートルのこの地方では、毎年 10 月に二週間ほどかけて茅を刈り取る。高低差のある茅場からケーブルやソリも使って運搬するので大変だが、高いところから降ろすのは比較的容易。この地方は 11 月には初雪が見られるが、10 月には刈り取りの時期になることも、カリヤスがこの地域で使われる理由である。

刈り取った茅は、冬に備えるため、まず合掌造りの建物の雪囲いとして使われる。雪が融け春になると、雪囲いしていた茅で屋根を葺く。毎年十分の一くらいずつ、屋根茅を葺き替えてゆく。そして降ろした古茅は選別され、痛みの少ないものは再利用し、傷んだ茅は桑畑の肥料にする。中間を省略すれば、二週間の茅刈りで一年分の屋根材と桑畑の肥やしを得ていることになる。

このように、茅(カリヤス)は段階的に利用されていく。最初は雪囲いで屋根茅とともに建物の断熱に利用され、最後は肥料にされるのでムダが無く、効率的である。故に持続可能なシステムになっているのである。

○茅の力と茅葺き文化の再生

また、茅場そのものにも、生物多様性の維持や炭素の固定、家畜の飼料、桑畑の肥料、山菜の収穫、地下水の涵養など、多面的な機能がある。炭素の固定だけを見ても、茅葺き屋根の重さは３０坪程度の家で約１２トンなので、その大半を占める炭素が３０年間、茅葺きを維持することで固定されていることになる。

イネ科の多年草である茅はケイ素分が多く、直立して高く成長するので草の王者と言える。空中から炭素(CO_2)、地中から窒素（N）とケイ素（Si）を吸収しながら、一年間に 2～3 メートル成長する。二酸化炭素の吸収量は 24ｔでスギ林の３倍に及ぶ。茅は秋に黄色く枯れると窒素分は根に戻り、地上部は炭素とガラス質の成分であるケイ素の組成になる。これがイネ科の多年草が細く、高く、まっすぐに育つ理由である。

茅の堆肥は桑だけでなく茶にも有益である。茶の木は茅の力で、新芽を何度も摘み取られても萌芽を繰り返す。茅には、土を蘇らせる力があるからであるが、その理由は以下の通り。

噴火によってつくられる火山灰土壌には、ススキなどのイネ科の多年草が優勢する。そして野焼きによってその植生が持続すると、炭化物と植物遺体が長期間堆積して黒ボク土が形成される。炭化物は微粒炭素としてススキの根に固着され、その厚さは数メートルに及ぶが、これは火山灰土に含まれるケイ

素の働きによるものとされる。こうして黒ボク土には大量の炭素が固定されるので、二酸化炭素の排出削減に大きく寄与していることにもなる。

日本列島は火山の島であり、定期的に噴火が繰り返されてきた。そのたびに列島は火山灰に覆われ、草原が出現したが、噴火が止んでも野焼きを継続することで、草原が維持されてきたのである。

ここに日本が持続可能な茅葺き大国であった理由がある。故に、茅葺きの営みを復活することは日本にとって、様々な意味で大きな意義があると考えている。

〇続いて上野弥智代事務局長が報告

茅葺き文化継承の取り組みとして、当協会では茅葺き職人連合を三年前に立ち上げた。課題もあるが、30 代、40 代の職人が育っていることが将来の希望となっている。

また、日本各地の茅場の関係者と連携を取りつつ、文化庁の委託や補助で「ふるさと文化財の森普及啓発事業」や「選定保存技術伝承事業」などを実施している。これまで大内宿（福島県下郷町）での活動や常陸風土記の丘(茨城県石岡市)での「茅葺きワークショップ」、阿蘇の茅刈り技術研修などを実施してきた。一昨年は上ノ原で青水との共同により「茅刈り・茅葺きワークショップ」を実施した。

一昨年、白川郷でヨーロッパなど世界六か国から茅葺き職人など関係者約 150 人が集まり、国際茅葺きフォーラムを開催した。フォーラムでは、イギリス、ドイツ、デンマーク、南アフリカ、オランダなどの国々の茅葺き事情について報告があった。中でもオランダには 25 万棟の茅葺きの建物が存在し、年間 2 千～3 千棟が新築され、1200 人の職人により屋根面積で 80 万㎡が施工されている。また、必要なヨシ 800 万束の内、75%を輸入している。そのオランダの参加者がフォーラムを通して学んだ日本の茅の循環利用について、「茅葺きの未来が日本にあった」と述べたことは意義深い。

東日本大震災　板倉の応急仮設住宅　屋根の断熱材として茅を利用（福島県いわき市）　富士山麓御殿場からトラック4台、群馬県みなかみ町から1台、茨城県石岡市八郷から1台、合計6台分の茅が支援された。
（写真　安藤邦廣）

10 年前の東日本大震災の際、茅葺き文化協会からの要請に応える形で、上ノ原の茅が福島県に建てられた仮設住宅の断熱材として活用された事例（**写真・左段下**）の紹介もあり、茅のもつ多様で大きな「力」に目を見開かされたセミナーでした。最後に、青水の西村、藤岡両幹事が感謝を込めて感想を述べ、セミナーは無事に終了しました。安藤先生並びに上野事務局長、本当にありがとうございました。

■2020 定例活動⑤
群馬県居住者限定プログラム
「雪中トレッキング」　　草野　洋

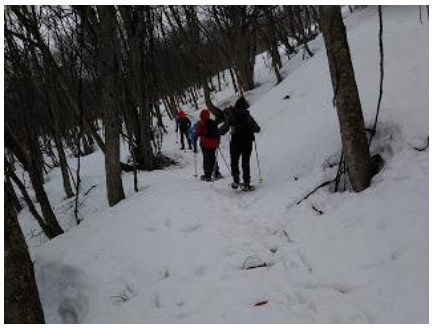
1月7日に発令された緊急事態宣言の解除を3月6日と想定して3月13、14日に設定していた本年度最後のプログラムは宣言の延長をうけて、急遽、実施方法を再検討。その結果、1都3県の参加希望者には辞退いただき、群馬県在住者のみを対象とした「群馬県居住者限定プログラム」となった。結果として、1日目5名、2日目5名（うち2日間通しの参加者は2名）の参加者があり、塾長、事務局長がインストラクター及びアテンド役として加わり実施した。

トチノキの冬芽を観察

1 日目は、あいにく小雨が降り続く天候の中、上ノ原の草（雪）原から「ゆるぶの森」をトレキング。 雪は少し柔らかいがカンジキ・スノーシューを履けばぬかることはない。この時季は積雪があるため冬芽も間近に見ることができる。キツネなどの動物の足跡もたくさん観察できた。十郎太沢沿いにトチノキなどの冬芽を観察しながら登る。

途中、樹皮を剥がされたミズキが目立つ。 ニホンジカの食害である。この時季餌がないためシカは樹皮をかじる。周囲の半分程がかじられ赤茶けた傷跡が痛々しい。すぐには枯れないだろうが成長に大きな影響を与える。ミズキは水気が多いので剥ぎやすいのだろう。冬季には凍らないよう、樹皮に糖分を増やしているので栄養価もそこそこあるのではないだろうか。シカの口でかみついて皮をはぎやすい、

シカの被害を受けたミズキ



ミズキの中・小径木がやられている。

途中センサーカメラのデータを回収。

「ゆるぶの森」は散策路が整備してあるがこの時季なら森の中を自由に歩ける。普段、散策路から見ることができない樹木にも近寄れる。違った角度から林の景色が楽しめるので、改めてこの森に惚れ直す。出来たばかりの「ガイドマップ」を参加者に配布したが、雨でぬれるので見ることができない。

イタヤカエデの樹液採取仕掛け

途中、塾長がイタヤカエデとシラカバにドリルで穴をあけ樹液を採る仕掛けを実演してくれたが時期的にちょっと早いので採取できないだろうとのことだった。

雨が強くなったので早めに「とんち」に帰り、これまでのセンサーカメラので捉えた上ノ原の動物を確認した。

2日目は、気温も低く小雪の降る中、塾長の長男で大幽洞へも何回も訪れている北山桂月君をガイドに加えて大幽洞へ氷筍観察トレキング。青水の行事に初めて参加した時、5歳だった桂月君も4月からは高校生である。体格も立派になってその後ろ姿がたくましい。

大幽洞への道は、最初の林道部分がなぜか除雪してありスノーシューは不要。途中から傾斜のある雪道であったが雪もいい具合に締り比較的歩きやすい。

大幽洞では大小さまざまな氷筍が出迎えてくれた。ひときわ大きな氷筍の中に水が溜まり岩屋の天井から水滴がポタポタ落ちるたびに中の水が揺れる様子を見ることが出来た。水滴の音で洞窟の中で音楽が奏でられているようであった。

大きな氷筍の先端で水が揺れる

帰路は急傾斜の所々でお尻で滑り落ち、童心に帰って楽しむことが出来た。

帰路はカラマツ林の中を歩く

青水は、群馬県みなかみ町藤原にフィールドを持っているものの、これまで県内の参加者は少なかった。

今回は、図らずも群馬県民優待プログラムとなったが、青水や藤原や上ノ原をもっと知ってもらうためにこのようなプログラムが必要ではと思う。

参加者感想　「藤原での貴重な経験」

デリア・ファン

こんにちは、台湾から参りましたデリアと申します。台湾ではずっと都会に住んでいたのであまり自然とふれ合ってきませんでした。だから、みなかみ町の自然といっぱいふれあうことや文化を体験したいとおもっています。

今回、森林塾青水の「雪中トレッキング＆自然観察」に参加させていただきました。初日の天気はあまりよくなく、あいにくの雨の中でしたが、神秘的な雰囲気に囲まれて、わくわくした気持ちとじーんとした気持ちになりました。

日本に昔からあるかんじきで上ノ原のゆるぶの森を散策しました。かんじきを着けるのは不便ですが、軽くて歩きやすかったです。ガイドさんからは、サルの顔のように見える木や触ったらベタベタになる木、他にも上ノ原にある珍しい耐寒植物を丁寧に紹介していただきました。さらにガイドさんがドリルで木に1センチくらい穴を開けて、木からペットボトルまでチューブを繋げて、メープルシロップを取るための仕掛けをしていました。しかし寒さのため、残念ながらシロップは出て来ませんでした。

二日目は、大幽洞コースを散策しました。参加者が歩きやすいように、ガイドさんが真っ白な雪の中に道を作ってくれました。大幽洞に着くまでの急な斜面は少し大変でしたが、全員で頑張って登りました。洞窟にはツンツンと氷筍が生えていたり、岩壁の上からは息をのむほど立派な氷柱が垂れ下がったりしていて、周りの壮大な景色と一緒に眺めることができました。ここまで登ってきた苦労は、言葉では表現できないほどの大自然を見た瞬間にすべて消えてしまいました。ガイドの北山さんと森林塾の草野さんのおかげで、藤原の自然といっぱいふれ合うことができました。これはすべて台湾では体験できないことなので、とても貴重な経験でした。本当に参加できて良かったです。

参加者感想　「神秘的な氷筍に感激」

須藤　光代

１日目は、雨模様で、昼食をとんちで済ませた後、入会の森へ向けて出発し、入り口でスノーシューを履いて、雪原を歩きました。ガイドさんも含めて総勢７人でした。

スキーも良いですが、このゆったりとした時間の中で、動物の足跡を見つけたり冬の木の芽を観察したり、私は草津に移住してから、初体験してスノーシューでのトレッキングが大好きになりました。ガイドの北山さんが、樹液が採れるかペットボトルを木にさしてくださったので、その後が楽しみです。

２日目は、標高が高いから、雨から雪に変わり、雪面は昨日よりも歩きやすかったです。除雪車が入っていたので、雪のない林道歩きは、ちょっと大変でしたが、スノーシューを履いて、傾斜のある山の中へ入っていくと、幻想的な景色が現れて素晴らしかったです。

大幽洞への最後の登りは、やはりきつかったですが、神秘的な氷筍に出会えることができ感激しました。以前ガイドしてもらった友達に、写真を送ったところ、この時期でも氷筍が残っているのだねと言われました。知る人ぞ知るという場所で、皆さん登っていらしたのにはびっくりしました。

また、来年も会いに行きたいなと思います。誰もケガすることもなく、楽しい時間を過ごせたことに感謝です。人数も 7～8 人がちょうどまとまって良いのかもしれません。

ありがとうございました。

藤原現地事務所報告
協力隊が自伐型林業の推進を本格化

北山　郁人

今年の４月から、みなかみ町の自伐型林業の推進のため、地域おこし協力隊として、２名の方がみなかみ町に移住され活動を始めました。伊良皆高史さんと柳沼翔子さんです。柳沼さんは、昨年から森林塾の会員にもなって頂き活動にも参加して頂いているご縁で、藤原に移住していただけました。

５月には、野焼きが出来なかった上ノ原の刈り払いを一緒に行い、林縁部の低木を刈り払うことが出

来ました。また、薪づくりや作業道の整備など日々いろいろな活動をしていただいております。

日々の活動の様子は、Facebook ページ「みなかみ WOOD JOB！」でご覧になれます(下に一部転載)。

～編集後記～

お待たせいたしました。「茅風通信」63 号をお届けします。

今年度も新型コロナ感染症に翻弄される幕開けとなりました。昨年は書面決議となった四月の総会は、今年は会場で実施し、セミナーも有意義に開催することができましたが、五月の野焼きと六月の遊歩道整備は中止となってしまいました。

しかし、上ノ原での活動は北山塾長をはじめ地元の人々の手によって継続しています。「ゆるぶの森」の入口に案内看板が設置されるとともに、自伐型林業のメンバーが茅場や作業道の整備、薪割りなどに汗を流しています。七月に今年はじめて訪れる上ノ原がどんな顔で迎えてくれるか、今から楽しみでもあります。(稲)